

「怪異・妖怪の世界」にむけて

常光 徹

第二九回大会のシンポジウムのテーマに怪異・妖怪を取り上げることを提案されたのは大会委員の花部英雄さんである。当日の司会を私が務めることになったため、内容や進行については二人で相談をしながらすすめてきた。

近年の怪異や妖怪に関する関心の高まりには眼を見張るものがあり、さまざまな領域で実に多彩な研究が進められている。口承文芸関係の学会としては、一九八二年に昔話懇話会（現日本昔話学会）が「昔話と妖怪」のテーマでシンポジウムを開催しており、その成果は『昔話―研究と資料―』二二号「昔話と妖怪」（三弥井書店）にまとめられている。「日本の昔話の妖怪」（佐久間惇一）、「南島昔話の妖怪」（福田晃）、「北欧の妖怪」（菅原邦城）について発表があり、柳田國男の妖怪論や妖怪の地域的な特質について議論が交わされている。二〇〇四年には説話・伝承学会が公開シンポジウム「怪異をめぐる説話・伝承」を開催した。「王権と怪異」（西山克）、「逆立ち幽霊をめぐる」(後小路薫)、「怪異現象をめぐる呪的なぐさ」(常光徹)の発表に、小南一郎氏と依田千百子氏のこ

メントを加えて活発な議論が交わされた。今回のシンポジウムもこうした学会の動向と成果を意識しながら計画を立てた。発表者については、怪異・妖怪の調査・研究を新しい視座から展開されている三人の方にお願いをした。西山克氏は、主に中世の日記に記された怪異の精緻な分析を通して、話の背後に横たわる王権の政治性やそこうごめく人々の思惑をリアルに描き出す仕事を発表されている。香川雅信氏は、江戸期、とくに十八世紀後半の博物学的な関心の高まりと印刷技術の革新がもたらした妖怪観の大きな変化に着目して、視覚的な存在としての妖怪について研究されている。田畑千秋氏は、奄美、沖縄に顕著にみられる豚に関する口承文芸や民俗、とりわけ、豚が美女や美男に化けて人間のものと通ってくる話を中心に、妖怪の本性を見抜く伝承、生活のなかの豚と口承文芸との関係、豚をめぐる説話の伝播の問題など数々の発表をされている。それぞれが扱う時代と関心の所在は異にしているが、いずれも怪異や妖怪にかかわる領域に立脚した研究を展開されており、重なり合う部分も少なくない。相互の見解に触発されるなかから、怪異・妖怪研究の新たな世界が見えてくるのではないか、それが今回の意図である。

三人の発表題目は次の通りである。「怪異を記録する―ということ」西山克。「化物からポケモンへ―キャラクターとしての妖怪―」香川雅信。「豚妖怪の伝承と伝播」田畑千秋。

(つねみつ・とおる／国立歴史民俗博物館)